

旅行メディアに見る植民地時代
— 『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・台湾編を中心に —

The Colonial Past of Taiwan as Described by the Japanese Tourism Media:
Focusing on the 'Chikyu No Arukikata Guidebooks'

岩田 晋典
IWATA Shinsuke

愛知大学国際コミュニケーション学部
Faculty of International Communication, Aichi university
E-mail: zooxanthella@gmail.com

Abstract : The Japanese Tourist Media frequently refer to the colonial period, when Japan ruled Taiwan between 1895-1945, nostalgically as a heritage of the 'good old days'. Focusing on 'Chikyu No Arukikata Guidebooks', a major travel guidebook series, this paper will examine how the past has been described: how the manner of descriptions have changed and which factors caused the change. An analysis of the frequency, amount of, and forms of descriptive terminology reveals the extent to which description has shifted from being one of: 'discussion in critical terms in columns' to one of: 'mentioning in neutral terms in explanatory sections.' This shift is based on two social conditions brought about by the democratization of Taiwan, variously known as Taiwanization or the so called Taiwanese Localization Movement. First, there has been a re-evaluation of Taiwanese-ness in Taiwan, evidence of which is the 'Homeland' movement and the authorization of historical monuments. Secondly, there has been a socio-psychological trend in Japan, a characteristic of which is increased sympathy for Taiwan and antipathy towards PRC – an attitude that has been prevalent for the last twenty years.

I. はじめに

台湾社会が経験した過去の描き方について、『地球の歩き方ガイドブック』シリーズの台湾編の初版「1987～88年版」と最新の「2011～2012年版」を比べると、著しい違いを見出すことができる。1987～88年版では、日本による植民地統治への批判的反省が散見されるが、名所や見どころの説明の中に植民地期への言及を見つけるのはなかなか難しい。それに対して2011～2012年版では植民地統治への言及が頻出し、かつさまざまな箇所ですべて過去が懐古的に描写されている。

日本による植民地統治に関連する事物が肯定的に取り上げられる傾向は、同シリーズに限った話ではない。近年日本で出版されている台湾向けの旅行ガイドブックは、植民地統治という歴史を積極的に観光資源として活用する言説で溢れている。“過去”が観光現象の中で重要な役割を果たしていることは今さら強調する必要もないことであろう。「歴史へのまなざし」(アーリ、1995)によって、歴史が資源化され、何か古い事物が「ヘリテージ」として観光対象であり続けている。ディスカバー・ジャパン・キャンペーンの例を持ち出すまでもなく、“古きよき過去”がツーリズムを活性化する大きな動力の一つであることを示す事例には事欠かない。

日本から台湾へのツーリズムにおいてもそれは変わらない。たしかに、観光商品としてつねに差異化の波にさらされていることからすれば、「ノスタルジア」や「懐かしさ」などの表現が今後もずっと日本における台湾観光を語る上でキーワードになっていくとは考えにくい。けれども、21世紀初頭現在それなしには台湾観光が成立しえないこともたしかである。

本稿の目的は、こうした懐古をキーワードに日本からアジア地域に作動するツーリズムを理解する作業の一環として、台湾を例に、日本による植民地統治期という過去がどのように記述され構成しているのか、そしてその要因としてどのような社会状況を見出すことができるのかを考察することにある。

分析は『地球の歩き方ガイドブック』シリーズの台湾編(以下、「台湾編」)に中心に行う。「台湾編」は初版の1987～88年版から最新の2011～2012年版までほぼ毎年改訂されてきた。本稿ではそれら22巻のうち、3年ごとに計9巻をピックアップし、その経年変化をたどることにした(表1)。また、同シリーズ以外の資料も適宜参照している。

以下第Ⅱ章では、問題の背景として台湾社会を、民族構成、近代史、日本からの台湾観光という3つの側面を通して概観する。次に第Ⅲ章では、「台湾編」の概要を示し、その上で第Ⅳ章において「植民地統治」がどのように扱われているのかを、植民地期への言及の頻度、その際に用いる用語、記述に当てられている分量を通して考察する。つづく第Ⅴ章では、前章で分析した記述の変化がどのような要因から生じているのかを、台湾と日本

それぞれの社会状況を視野に入れて考察する。

表1 分析対象とした『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・台湾編

	出版年
1987～88年版	1987
1990～91年版	1990
1993～94年版	1993
1996～97年版	1995
1999～2000年版	1998
2002～2003年版	2001
2005～2006年版	2005
2008～2009年版	2008
2011～2012年版	2011

注) いずれも「地球の歩き方編集室」による編集、ダイヤモンド・ビッグ社による出版である。

II. 問題の背景：台湾の概要

1. 民族構成

現在の台湾の人口は大まかに言って、原住民（先住民）¹⁾、中国大陸の南東部から移り住んできた人々の子孫（閩南人／福佬人と客家）、第二次世界大戦後に大陸各地から移住した国民党関係者を中心とする人々とその子孫（外省人）で構成されている。原住民、閩南／福佬人、客家、そして外省人の四集団は一般に「四大族群」と呼ばれている。

「本省人」は、四大族群のうち外省人以外の人々全てを指す場合と、原住民も除いた閩南／福佬人と客家のみを指す場合があり、本稿では主に後者の狭義の意味で用いている。

台湾では、国民党政権を通じ北京語が「国語」として公用語になっているが、民族別の人口構成が持つ多元性を反映して、北京語と台湾語（閩南語や福佬語ともいう）を中心とした多言語社会を形成している。

多文化性は、今日の台湾で事実上の国是になっているようだ。台湾政府が情報発信のために開設しているウェブサイト“Taiwan Today”では、「多元的な文化こそ台湾の文化財産」として台湾社会の多民族性が次のように謳われている。

1) 「原住民」に対して学術的には「先住民」の用語を用いるのが適切であるが、台湾では「原住民」という名称が自称として使用されかつ一般的であることを尊重し、本稿でもそのまま原住民と呼ぶことにしたい。

台湾は移民社会である。多くの台湾人は従来から、助け合い、互いに学び合う移民の精神を大事にしなが、400～500年もの間、次々と海を越え、原住民（先住民族）とともに美しい「フォルモサ（麗しの島）」を築いてきた。台湾では至るところで、閩南（福建省南部）や客家、眷村（外省人居住地域）の文化がふれ合い交流しているのを目にすることができる。つまり、われわれの社会ではそろって土地へのアイデンティティを共にし、族群（エスニシティ）や血縁、言葉や生活様式の違いといった壁を乗り越えることで、違いを許容し、お互いに思いやり、多元的な文化を分かち合うべきなのである。²⁾

台湾政府は現在、総人口における民族別統計を公開していない。参考までに、ウェブサイト“CIA The World Factbook”が発表している数字を引用しておく、Taiwanese（本省人）84%、mainland Chinese（外省人）14%、indigenous（原住民）2%となる³⁾。

2. 近現代における経緯

本稿の関心に沿って台湾の歴史について概観すると、日本による植民地化、戦後国民党政権による統治、そして民主化／台湾化という三つの出来事が重要なポイントとなる。

第一の大日本帝国による植民地支配は、1895年から1945年までの50年に及ぶものであった。この間に「近代化」として進められた開発は多方面にわたる。植民地時代に建設された建築物は、近代的／西洋的な建築であるにしろ和風建築であるにしろ、現在でも台北を中心に台湾各地に数多く散在し、今日「古蹟」として認定されているものも少なくなく（詳しくは後述）、重要な観光資源となっている。また、植民地教育の一環として導入された日本語教育を受けた高齢者、いわゆる日本語世代の存在は、今日の日本社会でもしばしばメディアが取り上げる対象でもある⁴⁾。こうした高齢者の中には、旅行者に対してボランティアの日本語観光ガイドを努める人も珍しくない。彼／彼女らとの触れ合い・出会いは、台湾旅行の思い出として好んで語られるテーマでもある。

第二のポイントが、第二次世界大戦後の国民党による統治の開始である。中国共産党との内戦に敗れる形で台湾に逃れた国民党は、台湾島住民に対して“二度目の植民地支配”と呼びうる統治を行なった（周、2007：219）。人口で言えば少数派になる外省人が政治経済の実験を握り、二二八事件や白色テロに代表される暴力的支配体制を敷きつつ、統治

2) ウェブサイト“Taiwan Today”：「多元的な文化こそ台湾の文化財産」（URL：<http://taiwantoday.tw/ct.asp?xItem=173478&ctNode=1776>）2011年8月8日閲覧。

3) ウェブサイト“CIA The World Factbook”（URL：<https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/>）、2011年8月13日閲覧。なお、この統計では示されていないが、今日台湾には東南アジア諸国からの労働移民も存在する。

4) たとえば近年話題になったものに、映像作家・酒井充子によるドキュメンタリー映画『台湾人生』（酒井、2008）と、同名のルポルタージュ『台湾人生』（酒井、2010）がある。

機構や主要産業の多くの運営から本省人を排除した（若林、2001：65）。いわゆる省籍矛盾である。白色テロは、当初は政治警察による共産主義者の摘発を目的としており、「白色」という言葉もそれに由来しているが、後年は「台湾の独立運動や台湾に関する学習、二・二八事件への言及」（上水流、2007：88）自体も逮捕の理由となった。

文化面で植民地主義的性格を強く帯びるものとして、国民党による言語政策を挙げることができる。「国語」として北京語が公用語化される一方で、植民地教育を通して普及した日本語はもちろん、多くの本省人の母語である台湾語も禁止された。北京語を習得していない場合は公務員になれないといったように、統治者言語の運用能力が国家資源へのアクセスを左右した。北京語能力の有無という文化面での差異が、少数派外省人による台湾社会の支配という政治経済的差異と重複していた。

よく言われることであるが、しばしば日本で肯定的に言及される“台湾社会の親日さ”の背景には、こうした国民党による“植民地支配”があることは本稿でも触れておかなければならない。もちろん哈日族の出現が示唆するように⁵⁾、台湾社会における“親日”の要因は一樣ではないであろう。けれども、“同じ植民地支配でも、国民党に比べたら日本の方がマシだった”という認識があり、かつ、国民党独裁という環境下で親日を示すことは、それ自体がアテツケとして、暴力的な体制に対する間接的な批判になりえてきたという社会状況がある。簡単に言えば、日本に対する肯定的な評価はあくまでも、同じ支配者の国民党と比較した上での相対的な判断、「本省人における反外省人・反国民党感情の反射」（若林、2001：74）なのである。

最後のポイントが、国民党による一党独裁体制の終結、すなわち民主化である。「党外」活動として始まった民主化は、1986年の民主進歩党の結党、1987年の戒厳令の解除、1988年の本省人李登輝の総統就任を経て、1990年代に大きく進展した。民主化は、外省人・国民党にかぎらない台湾住民一般が政治に参画することを可能にした。その結果生じたのが、四大族群を中心に展開したエスニック政治である。「民主化とともに各族群が自己主張を行った」（ibid.：193）といわれる所以である。

しかしながら、本省人が多数派であることを主な要因として、民主化／エスニック政治化は、“外省人の外来政権”が支配する台湾を“台湾人”が取り戻そうと試みるという、台湾の“台湾化”、もしくは社会政治構造を台湾本土に則ったものに変えるという意味での“本土化”の形を取るようになった。“二度目の植民地化”が生んだネガティブな自集団意識を克服するために、「台湾人要出頭天（台湾人として胸を張ろう）」という台湾語のスローガンが80年代の民主化要求運動で多用されたことが示すように（ibid.：131）、本

5) 現代台湾社会における日本文化の受容については、(岩淵、2001)や(酒井、2004)を参集されたい。

省人の政治的権利の獲得要求は、歴史・言語における“台湾的なもの”を復権する試みも伴っていたのである。民進黨の政治集会などの公の場でも台湾語が好んで使われたし、また、陳水扁政権下では、公的物事の名称を非国民党的なものに変える、いわゆる正名運動が生じ、その一環として中華民国のパスポートに「TAIWAN」の名称が加えられるようになっていく。民衆レベルでは1990年代に郷土ブームが起きているが、これについては後述したい。

3. 日本からの台湾観光

旅行者数では近年大陸からの旅行者に首位を譲り渡しているものの、日本は台湾にとって最も重要なゲスト国で在り続けている（表2）。また日本にとっても台湾はアジア地域の中で中国、韓国、タイ、香港とともに人気のあるデスティネーションである。たとえば大手旅行会社JTBが発行する「JTBニュースリリース」では、1980年代の初めにすでに香港、韓国とともに「東南アジア"御三家"」に位置づけられている（JTB広報室、1981：3）。

台湾政府交通部観光局は、近年観光振興キャンペーンの実施に精力的に取り組んできていく。2002年に外国人観光客を増加させる計画を発表し、同年8月から重点市場の一つである日本に対して、「ニッポンの疲れに、台湾」というキャッチフレーズのPRを開始した（国際観光振興会、2003：152）。2008年と2009年には両年を「旅行台湾年」と名づけ、2010年からはアイドルグループをイメージキャラクターにした「旅行台湾・感動100」という名称のキャンペーンを、さらに2011年には「台日観光交流年」というプロジェクトを開始している。

表2 国別訪台旅行者数（単位：人）

		2010年	2009年
1	大陸	1,630,735	972,123
2	日本	1,080,153	1,000,661
3	香港・マカオ	794,362	718,806
4	米国	395,729	369,258
5	マレーシア	285,734	166,987
6	シンガポール	241,334	194,523
7	韓国	216,901	167,641
8	インドネシア	123,834	106,612
9	タイ	92,949	78,405
10	フィリピン	87,944	77,206

注）中華民国交通部観光局ホームページ

(<http://admin.taiwan.net.tw/index.aspx>) の統計をもとに作成。

こうした台湾政府の施策の一つとして、交通部観光局のバックアップの下で製作された旅行番組『台湾ノスタルジア』と関連雑誌『台湾ノスタルジア：懐かしい日本に出会う旅』を挙げることができる。2009年10月28日に開かれた制作記念記者会見には、駐日中華民国大使館に相当する台北駐日経済文化代表処の羅坤燦・副代表も出席した。挨拶に立った副代表は、観光を「単なる経済的な利益だけでなく、双方の理解を図るものであり、友好親善でもあり、効果的な交流」と位置づけたうえで、次のように述べている。

台日間は地理的・文化的・歴史的に緊密な関係にあり、特に日本統治時代の50年間の歴史の中で建設された総統府、司法院、立法院、台北賓館などの建築物が台湾にはまだたくさん残っている。日本が台湾に残してきた歴史的な文化遺産としての建築物は日本との関係の上で、大きな意味を持つものである。日本の方々は台湾のグルメや故宮などの観光のほか、台湾にある日本統治時代の懐かしき建築物も見えていただければ、台日関係の促進に大いに役立つことになると確信している。⁶⁾

旧宗主国に駐在する大使館の代表者が、かつての植民地関係を「遺産」と語り、両国間関係を促進する基盤と位置付ける——よく比較されるように、この姿勢は旧朝鮮総督府を解体した大韓民国と対照的であるが、いずれにしても、この発言から台湾政府にとって日本からの観光客がどの程度重要であるかを理解することができるであろう。

Ⅲ. 「台湾編」に見られる形式面での変化

1. 『地球の歩き方』シリーズおよび「台湾編」の概要

本稿で分析の対象にした「地球の歩き方ガイドブック」シリーズは、1979年にヨーロッパ編とアメリカ編とともに始まっている。『地球の歩き方』のシリーズには、「地球の歩き方ムック」や「地球の歩き方aruco」など、複数のサブシリーズがあり、先のヨーロッパ編やアメリカ編のような、最も古くかつ該当地域を全般的に取り扱うシリーズは単に「地球の歩き方ガイドブック」というシリーズ名になっている⁷⁾。

こうした「地球の歩き方ガイドブック」シリーズを、日本の海外旅行向けガイドブック

6) 台湾駐日経済文化代表処ホームページ“台湾週報”：『『台湾ノスタルジア』の出版・映像制作完成披露の記者会見にマダム・ヤンさんらが出席』

(URL：<http://www.taiwanembassy.org/ct.asp?xItem=115047&ctNode=3591&mp=202>)、2011年7月15日閲覧。

7) 詳しくは『地球の歩き方』のウェブサイト“地球の歩き方 行き先別 最新刊 全リスト 探せる★便覧” (URL：<http://www.arukikata.co.jp/guidebook/binran/index.html>) を参照されたい。

の中で一番メジャーなものと位置づけたとしても、それは言い過ぎではあるまい。今日同シリーズが日本の海外旅行向けガイドブックの「マーケットシェア」において占める割合は「約50%」だという（立教大学大学院ビジネスデザイン研究科、2009：1）。代表取締役社長の藤岡比左志は、同シリーズが30年を経た現在ここまでシェアを広げた要因を、海外旅行マーケットの拡大の波に乗った、取り扱い地域を積極的に増やした、個人旅行専門のガイドブックが90年代半ばまで他になかったという三点を挙げて説明している（ibid.：2）。

本稿で対象となる「台湾編」すなわち「地球の歩き方ガイドブック」シリーズ・台湾編の初版は、まさしく海外旅行が時代の華となった1980年代の半ば、プラザ合意を経てバブル景気に入った1987年に刊行されている。すでに述べたように、その後ほぼ毎年改訂され、最新版「2011～2012年版」（2011）まで22冊が出版されている。なお、『地球の歩き方』のシリーズの中で台湾を扱うものは、「地球の歩き方ガイドブック」シリーズ・台湾編の他に、同シリーズ・台北編（2000～2010）、「地球の歩き方ポケット」シリーズ・台北編（2002～2007）、「地球の歩き方ムック」シリーズ・台湾編（2002, 2004, 2006, 2007～2010）、「地球の歩き方aruco」シリーズ・台北編（2010）となっている（上記カッコ内はいずれも出版年）。

「地球の歩き方ガイドブック」シリーズは、『地球の歩き方』以外の多くの旅行ガイドブックと同様、デスティネーション別に出版されている。また、各巻の中身も、デスティネーション内の地域区分が中心となって章立てがなされる点で共通している。

台湾編もそれに変わりはない。デスティネーションすなわち台湾内の地域区分——北部・中部・東部・南部、あるいは大都市である台北——を中心に、目次、特集、台湾の基本的情報、技術・マニュアル、コラムという要素で構成されている。通常、特集は目次とともに冒頭に配置されるが、巻によっては他要素の順番が入れ替わることもある。コラムは複数あり、要素の間や各要素内に散発的に配置されるのが普通である。

台湾内の各地域は、階層的な構造を通して紹介されていく。単純化すれば、「北部」や「南部」などの大区分、都市や町、山や海岸などの中区分、個々の観光対象などを紹介する小区分という3段階の構造になる。また、台北のような大都市の場合、台北北部、同南部といったように、中区分である市街部がさらに区域化された上で、小区分の説明に移ることもある。

2. 客観的・小项目的・事典的メディアへ

「台湾編」では形式の面において、90年代に大きなシフトを確認することができる。すなわち<主観的に体験を語る大項目主義の紀行・地誌>から<客観的に情報を提供する小項目主義の事典・イエローページ>への変化である。以下、相互に重複するものの、三

点に分けて解説しよう。

第一が小項目化である。1993～94年版を例にとってみよう。同年版では「目でみる台北の素顔」(82-87)⁸⁾として、台北の街が写真付き紀行エッセイのような文章で紹介されている。また、宿泊・食事・買物それぞれのセクションでは、ホテルやレストランなどの個々の施設が紹介される前、セクションの冒頭部分に半ページから一ページ前後の解説文がある。たとえば、買物のセクションでは以下のように値引き交渉を勧めている(115)。

日本人が買い物をする場合、とまどうのは値札の価格が売り値でないこと。特にみやげもの専門店の値段は大幅に上乗せしているの、必ず値切ること。どんなにしぶっても2割は引ける。(中略)ともかく遠慮せずに値切ってみることから始めるといい。

こうした記述はその後姿を消していく。たとえば2011～2012年版では宿泊・食事・買物それぞれのセクションは、各分野について解説する部分を含まずに、直接個々の施設の紹介から始まっている。

第二が、脱地誌化とでも呼ぶべき変化である。90年代前半の各号では、コラムを用いて、政治・経済から、スポーツ、貯金・結婚などの「日常」、若者文化、交通事情、さらにはピンロウも含め、台湾社会をさまざまな側面から紹介する姿勢が強く見られた。年を経るにつれて、こうしたコラムは減少し、個々の観光対象の紹介が中心となっていく。地誌的・多面的情報から観光情報(案内)へ特化が進んだと言える。

第三が、情報の客観化である。ここでいう「客観」とは、個人的な心情についての記述を含まない、もしくは、特定の価値観を強調しないといった意味でのものである。初版から数年間の巻では、「私たちが台湾を旅した12人です！」として執筆者の若い女性たちが写真付きで、次のような各セリフとともに紹介されている(1987～88年版:2-3)。

アクセサリショッピングのノウハウは私にまかせて！／スヌーピーの太郎と小太郎を連れていきました。人気者だったんだよー！！／廟の美しさと人間っぼさに感動！占いのようなお祈りを試してみてもね／何年ぶりという、大きな台風が直撃しました。おかげで、台北しか歩けなかった。残念！／高雄を中心に、南国の都市パワーをじっくり観察してきました！／パイワン族の人に教えてもらって、彫刻にチャレンジしました／北部と西海岸を中心にまわってきました／日本人が50年間暮らしていたことを台湾の人を通して感じました。／台湾は、女の子のひとり旅初体験にせつたいびったり！これ実感よ／食べ歩きすぎて、おなかがいなくなっちゃったのダ！／霧社事件の後をたどって旅をしました。いろいろ考えさせられます／ダイビングの

8) 本稿では煩雑さをさけるために、「地球の歩き方ガイドブック」シリーズからの引用は、どの巻か分かりにくい箇所をのぞいて、ページ数のみの表記としている。

快感を求めて南へ直行。あー青い海、白い砂浜…。

台湾各地の紹介の間に、彼女らが思い思いに自らの経験を綴ったコラムが散りばめられ、中には手描きのイラストが加えられたものもある。こうした執筆者個々人の存在を意識させる部分は、1990年代半ばには姿を消している。いわば、執筆者の没個性化であり、紀行と比較した場合のガイドブックの特徴の一つである著者の無名性が強まっていったことが分かる⁹⁾。

1993～94年版には、旅行中に日本人旅行者がお互いを避け合うことを台湾人が奇異に感じるという内容のコラム「旅先のヘンな日本人」(211)がある。これは、当初『地球の歩き方』シリーズが若者の個人旅行を理想型としていたことからすれば、旅行者同士の交流を勧めるための間接的な批判と読むことが可能である。けれども、こうした非「客観」的な記述もその後目立たなくなっていく。

以上の変化は、<主観的、大項目主義的、紀行・地誌的>から、<客観的、小項目主義的、事典・イエローページ的>へのシフトと言い換えることができる。こうした変化は、『地球の歩き方』シリーズが全体としてたどった変遷に沿ったものだと言えるかもしれない。同シリーズの製作スタッフにインタビューを行った山口らによれば、同シリーズでは2000年前後に編集方針の転換があったという。山口らはそれを、「読み物から、ガイドブックになった」(山口・山口、2009:282)と表現している。

『地球の歩き方』シリーズは当初、若者による個人・自由旅行を念頭においたものとして、旅行者からの投稿を重用したり、手書きの地図を盛り込むなど、ミニコミ誌的な性格を強く持つものであった。「台湾編」では、先の「私たちが台湾を旅した12人です!」という箇所がそれに当てはまるであろう。

それに対して、上記の転換では、「若い人に呼びかけるキミ／ボク文体」を止めて若者以外も読者として想定した文体を採ること、「貧乏旅行のイメージ」を払拭すること、形式の面としては情報の検索性を高めることなどが重視されたという (ibid.:282)。「台湾編」に見られる変化とこうした編集方針のシフトは、時期的に若干異なるものであるが、『地球の歩き方』シリーズが経験した変遷の一部として考えるべきかもしれない。

IV. 植民地統治の扱われ方

1. 言及の推移

すでに触れたように、「台湾編」における植民地統治への言及は徐々に増加してきた。

9) ガイドブックの著者の無名性については、別稿で考察したことがある(岩田、2010:9-10)。

本節では、植民地統治に触れている箇所を累計を通して、全体の傾向を把握してみよう。対象としたのは、前節で整理した大中小という区分のうち小区分、すなわち個々の具体的な観光対象を紹介する箇所である(図1)。これには見どころや名所のほかに、宿泊施設、飲食施設、買物施設の紹介箇所も含む。また、植民地統治に言及している箇所は近年では特集などにも見られ、広範囲に及ぶため、カウントの対象は台北、台中、台東・花蓮、高雄・台南という四都市地域に限定している。

表3は、上記地域の観光対象紹介文の中で、植民地統治に言及している箇所の数をまとめたものである。全体として増加していることがよく分かる。台北に関して言えば、1993~94年版で初めて言及があるが、これは、中華民国総統府を「植民地時代」の建築物として言及したものである。台北における言及箇所は、2011年には10箇所まで増加している。

また、高雄・台南での増加が目立つのは、高鐵(新幹線)の開通が影響しているからと思われる。新幹線は2005~2006年版、2008~2009年版、2011~2012年版の特集で紹介されている。



図1 本稿で「小区分」と分類した観光対象紹介文(地球の歩き方編集室、2011: 90-91)

表3 日本統治期への言及を含む観光対象紹介文

	台北	高雄・台南	台中	花蓮・台東	計
1987～88年版	0	5	1	2	8
1990～91年版	0	4	2	1	7
1993～94年版	1	5	1		7
1996～97年版	1	5	1	1	8
1999～2000年版	3	5	1	2	11
2002～2003年版	8	6	1	2	17
2005～2006年版	8	6	1	5	20
2008～2009年版	10	10	0	3	23
2011～2012年版	10	14	0	4	28

このように、植民地統治への言及は明らかに増加しているのであるが、だからといってそれは、植民地統治時代が以前にも増して論じられるようになったということではない。たしかに観光対象紹介文で言及される頻度は増加しているとはいえ、それはあくまでも「客観」的な、こう言ってよければ差しさわりの無い、短い言及である。またそこで用いられる表現も、「植民地時代」などの批判を喚起する表現ではなく、「統治期」というよりニュートラルな語感を持つものが主流になっている。

2. 情報の縮小

先に述べたように、個人的な経験が徐々に姿を消していくのと連動して、植民地統治について自省・反省する記述もなくなっていく。たとえば前述の、執筆者の女性たちが実名で自らの経験をつづった1987～88年版のコラムには、石のレリーフ作りに挑戦した執筆者が「日本が台湾を占領してきたという、歴史的事実」(280)を再確認する部分がある。あるいは他に、「日本が過去、この国を占領した、という事実」を強く認識していた自分が旅行中に親切にされ、「人々の記憶」や「人々の過去に対する受けとめ方」について考えをめぐらすコラムもある(242)。こうしたコラムは1996～97年版ではもはや見られない。

一言で言えば植民地統治の扱いは、質と量双方から見て徐々に縮小していったと言える。それを端的に示すものとして、霧社事件の扱い方を取り上げよう。

霧社事件は、日本植民地時代の1930年に台湾中部の霧社で発生した原住民武装蜂起事件である。植民地政府が進めた「近代化」に対する反発を主な要因として発生したこの事件では、原住民の集団が日本人130名余りを殺害し、つづいて約1ヶ月をかけて植民地政府が「反乱」した原住民集団を鎮圧するという経緯をたどった。

表4 霧社の位置づけと霧社事件に関する記述

	中区分での 位置づけ	分量 (頁)	コ ラ ム		主 な 内 容
1987～88 年版	「埔里」か らの訪問 地として	約2	「霧社事件と日本 軍」(2頁)	「わ・た・し・の 台湾 霧社1986」	「わ・た・し・の台湾 霧社1986」に は、「霧社在住・ブヌン族 高聡義 (日本名加藤直市)さん」による日本 政府の補償への批判の箇所がある。
1990～91 年版	同上	約1	同上	同上	同上。
1993～94 年版	同上	約1	同上	同上	同上。
1996～97 年版	「霧社」	約2.5	同上	なし	「霧社事件と日本軍」のコラムに、「高 聡義」氏による批判の箇所が移動する
1999～2000 年版	同上	約2.5	同上		
2002～2003 年版	同上	約2.5	同上		
2005～2006 年版	「霧社・廬 山温泉」	約4*	「霧社事件につい て」(2頁)		「高聡義」氏による批判の箇所がなく なる。
2008～2009 年版	同上	約3	「霧社事件につい て」(1頁)		さらに高砂義勇団と日本政府による補 償の部分が削られ、単に経緯を説明す るコラムに変わる。
2011～2012 年版	同上	約4*	同上		

* 半分近くがホテルとレストランの紹介。

表4は、「台湾編」における霧社および霧社事件の取扱いをまとめたものである。当初は埔里に含まれていた霧社が、1996～97年版からは一つのセクション（第三章2の分類で言えば中区分）として独立しているし、また霧社を紹介する分量も増加している。しかし、それとは対照的に、霧社とその周辺で地元の人々と交流した経験をまとめたコラム「わ・た・し・の台湾 霧社1986」が1996～97年版以降記載されなくなっている。霧社事件について解説するコラムも、2005～2006年版では名称を「霧社事件と日本軍」から「霧社事件について」に変えている。「日本軍」という言葉の消失は、暴力と結びついたその歴史性ととも考えると、興味深い変化である。また、当初は実名入りであった日本政府に対する批判の記述も徐々に消えていく。2008～2009年版では、2ページだった分量も半減するにいたっている。

こうした変化を経て、霧社事件についてのコラムの内容は、単に事件の経緯を説明するものになった。コラム「わ・た・し・の台湾 霧社1986」が1996～97年版以降記載され

なくなっているのは、情報の古さがマイナスとなる旅行ガイドブックのジャーナリ性格からすれば当然の処置と受け取ることもできるし、すでに繰り返し指摘してきた、個人的な体験談の類が排除されていくプロセスの表れとみなすことも可能である。けれども上記のような、全体としての霧社関連の記述の縮小を念頭に置くと、単なるプラクティカルな要因による消失以上のものが感じられてしまう。

3. 用語面での変化

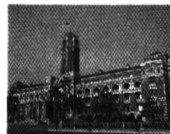
植民地統治を指示する用語の変化は、霧社事件だけに指摘できるものではない。中華民国総統府（かつての台湾総督府）の紹介文の変化にも現れている（表5）。総統府が建設された背景について初めて触れたのは、1990～91年版のコラム「台北の街なみ時間旅行」であるが、小区分として総統府を紹介する文章の中に植民地統治への言及が現れるのは1993～94年版になってからである（図2、3）。

1999～2000年版までは「日本植民地時代」だった表記が、2002～2003年版からは「日本統治時代」というように、よりニュートラルなニュアンスを持つ用語に変わっている。1993～94年版から1996～97年版にかけての「焼死」から「死傷」という変換は、単に適切な表現に変えただけなのかもしれないが、そこでも比較的激しいものからニュートラルなものへの意味合いの変化が生じていることもたしかである。

このような、「植民地」や「日本軍」といった批判力のある用語は、「支配」、「帝国主義」、「占領」などとともにとくに初期の各巻のコラムや特集でよく見られるものであるが、近年の巻ではほとんど使われていない。

★だっ広い道路の向こうにテンと構える 総統府

台北新公園の西側にある、レンガづくりのモダンな建物。このあたりは**官庁街**で、道路幅も広い。10月10日は、**双十節**で**中華民国の建国記念日**になっているが、このときの総統府のイルミネーションは、とても美しい。広場で行われるパレードもおもしろい。



総統府・レンガ建築に横櫛樹が美しい。

図2 1987～88年版での総統府の紹介文（P.99）

日本統治期に建築された	MAP
総統府	P.70
総統府	A-3

そうどうふ
ソントンフー

台湾の総統府のおかれている赤レンガ造りの建物。日本統治期の台湾総督府ビルで、1919年完成。第2次世界大戦末期に米軍の爆撃で内部が全焼し、多くの人々が死傷した。その後、国民党政権が中国大陸から移ってきて、内部を改装し総統府とし、今にいたっている。このあたりは官庁街で道路幅も広い。10月10日の**国慶日**（**双十節**とも呼ばれ、**中華民国建国記念日**）のイルミネーションはとてきれいで、広場で行われるパレードも見ごたえがある。

総統府周辺は台湾の豊ヶ園

図3 2008～2009年版での総統府の紹介文（P.84）

表5 台湾総統府の紹介文における日本統治への言及（抜粋）

1987～88年版	(なし)
1990～91年版	(なし)
1993～94年版	「かつての日本植民地時代の台湾総督府ビルで、第2次世界大戦末期にアメリカ軍の爆撃で全焼し、多くの人々が焼死した。その後国民党政権が…」(100)
1996～97年版	「かつての日本植民地時代の台湾総督府ビルで、第二次世界大戦末期にアメリカ軍の爆撃で全焼し、多くの人々が死傷した。その後国民党政権が…」(100)
1999～2000年版	「かつての日本植民地時代の台湾総督府ビルで、1919年完成。第二次世界大戦末期にアメリカ軍の爆撃で内部が全焼し、多くの人々が死傷した。その後国民党政権が…」(66)
2002～2003年版	「かつての日本統治時代の台湾総督府ビルで、1919年完成。第二次世界大戦末期にアメリカ軍の爆撃で内部が全焼し、多くの人々が死傷した。その後、国民党政権が…」(57)
2005～2006年版	「かつての日本統治時代の台湾総督府ビルで、1919年完成。第二次世界大戦末期にアメリカ軍の爆撃で内部が全焼し、多くの人々が死傷した。その後、国民党政権が…」(84)
2008～2009年版	「日本統治時代の台湾総督府ビルで、1919年完成。第2次世界大戦末期にアメリカ軍の爆撃で内部が内部が全焼し、多くの人々が死傷した。その後、国民党政権が…」(84)
2011～2012年版	「日本統治時代の台湾総督府ビルで、1919年完成。第2次世界大戦末期にアメリカ軍の爆撃で内部が全焼し、多くの人々が死傷した。その後、国民党政権が…」(85)

注) 抜粋文章末の数字は記載ページを指す。

前述の1990～91年版のコラム「台北の街なみ時間旅行」は、圓山大飯店が建つ場所にかつて「日本帝国主義のシンボル台北神社」が建立されていたと解説している(98)。また1993～94年版の原住民に関する特集では、日本による「植民地時代」に原住民の生活習慣が変容したことが説明され、また今日原住民とコミュニケーションを取るには「北京語か、植民地時代に強制された日本語」になると述べられている(26-49)。面白いことに、言語を強制したのは「日本」なのであり、国民党政権下で行われた北京語の“強制”については何も触れていない。

一方、2011～2012年版では、「霧社事件」の説明の箇所を除いて、「台湾の文化と人々」というコラムの中に「割譲」や「統治時代」という表現が見られるのみである(188)。日本人と台湾人の間にあった差別を喚起するような部分は見当たらず、植民地統治が中立的なものとして設定されている。

こうした推移の中で一つのポイントとなるのが、植民地統治期への言及数が増加する1999～2000年版である。この巻には「今も残る『日本』」(23)という特集が設けられており、神社や温泉、駅舎などの植民地時代の遺構・遺物が、歴史的背景と現在での利用についての説明とともに紹介されている。そこで言及される植民地時代の描写は、淡々とした、上述したような意味での客観的なものである。そして、それと同時に、「統治者としての日本人は、教育、治安維持、衛生管理、通信に力を入れ、各地に日本風建築が建てられた」というように、統治の適切さを述べている箇所もある。そこで観光対象として提示されているものは、たしかに植民地統治を資源とするものだとしても、訪れて楽しむべきヘリテージである。ほかにも、お土産物の候補を羅列するページで、「レトロな絵葉書 日本統治時代の絵葉書の複製品」(27)が取り上げられているなど、植民地統治を肯定的に呈示する箇所がある。

その一方で1999～2000年版には、植民地統治を自省する記述も共存している。あるいは残存と言うべきかもしれない。ある旅行者が台北近郊の温泉地として知られる烏来を訪問した経験をつづったコラム「十字架と日の丸」では、原住民がかつて高砂義勇隊として第二次世界大戦に参加した事実に触れ、「みやげ物をひやかして歩く日本人団体客と、その建物のすぐ上に立つ十字架のまわりの日の丸に、複雑な思いのした烏来日帰り旅行であった」(164)としめくくっている。こうしてみると、1999～2000年版は過渡期にあるものと言えるのかもしれない。

2005～2006年版でも植民地時代の事物が特集で取り上げられ、各地の建築物、銅像、記念碑が紹介されているが、そこでも、植民地統治が有していた負の側面には触れていない。過去から「ダーク」な部分を除去し、観光対象として提示することが、結果として植民地統治が妥当・適切であったと意味するにいたっていると言っても過言ではない。

以上の議論をまとめれば、<批判力のある表現でコラムや特集を中心に語る過去>というものから、<より中立的な用語を用いて各紹介文の中で言及する過去>というように、過去の記述の在り様に変化したとなるであろう。またそれは、ネガティブな語り口から、たとえ手放しの賞賛は含まれないとしても、ポジティブな語り口への変化と言い換えることもできる。

V. 記述の変化の要因

1. “台湾”の一部としての“日本”

では、<批判力のある表現でコラムや特集を中心に過去を語る>から<より中立的な用語を用いて各紹介文の中で過去について言及する>へという変化が生じた要因として何が考えられるのか、考えてみたい。

短く軽い言及に変わっていくという推移は、すでに指摘したような、「台湾編」の形式面での変化とも合致するものである。こうしたメディアの形式に関する変化は決して軽視すべきではないが、本章では、民主化／台湾化という台湾社会が経験した大きな流れに注目することで、二つの要因を指摘しておきたい。第一が台湾社会における台湾的なものの評価、そして第二が日本社会における、台湾への関心ならびに共感、そして反中国意識である。

1986年から1996年までの「民主化の10年」は、「台湾ナショナリズムの台頭とともに台湾のナショナル・アイデンティティにかかわる対立」(若林、2001:195)を台湾政治の前面に押し出すものとなった。こうした政治面での変化は、当然のなりゆきとして、一般庶民の知的関心にまで変化を及ぼしている。台湾社会における台湾的なものの評価は、政治面での変化の一部として生じたものであり、具体的には古蹟指定の活発化、そして台湾を「郷土」として評価する動きとして現れている。

「古蹟」とは日本における文化財のようなものであり、国家や市などの地方自治体が重要とみなす過去の遺物が「古蹟」の指定を受ける。古蹟指定について調査を行った上水流によれば、台湾において指定が盛んになったのは1990年代、とくに半ばであり、それは「国政レベルでも市政レベルでも急速に本土化が推進される時期」(上水流、2007:89)と重なっている。また、古蹟として指定された事物は、2004年の時点で全体の8割近くが日本統治期のものであり、「本土化が急速に進む状況と関連して、日本統治期の建築物が古蹟指定になっている特徴」を見出すことができる (ibid.:93-94)。

けれども、日本統治期のものであることそれ自体が「古蹟」として指定される基準となっているわけではない。古蹟指定される日本統治期の建築物には西洋建築物が多いが、そこには『『日本』ではなく、『近代化』の『見証』として古蹟指定している台湾側の意識』を確認できる (ibid.:106)。すなわち、あくまでも台湾社会から見て価値の認められるものが重要なのであり、台湾の独自性を主張する際に、その構成要素として日本に関連するものが言及されているのである。

したがって、台湾独立運動と一線を画し、かつ、かつての敵国である日本に関するものを台湾の独自性の中に含めたくない国民党的な立場からすれば、日本による植民地統治期の事物を「古蹟」に指定することは避けるべきこととなる。事実、1998年の馬英九の台北市長就任で古蹟の指定には一時的な停滞が見られたという (ibid.:90)。

こうした古蹟指定と連動して、下からの台湾らしさの探求も1990年代に盛んになっている。片倉によれば、1990年ごろから「郷土史探訪ブーム」(片倉、2009:19)が生じ、植民地統治期の事物が探訪や研究の対象となっていく。1996年ごろからは郷土史をテーマにした書籍が増え、さらに、2000年以降は歴史建築や古蹟の探訪が市民レベルで人気を博すようになり、それをターゲットにしたガイド本が数多く刊行された。こういった書

籍は「おおむね安定した売れ行きを示している」という (ibid.: 20)

また片倉は「台湾編」の1990～91年版の中でも「ふるさと再発見ブームの到来」(342)として、台湾史関係の書籍が充実していること、植民地時代に日本語で書かれた資料の複製版も出版されていること、さらに注目すべき傾向として「ブーム」の中心に若者がいることを報告している。

このような郷土ブームは、「台湾編」にも直接的に影響している。今日「ノスタルジック」あるいは「郷愁漂う世界」(JTBパブリッシング 2010: 6-7)として台湾観光の目玉になっている九份が、「台湾編」で紹介されるようになったのは、1996～97年版からのことである。台湾社会の「レトロブーム」によって一大観光地になっていることや、日本人旅行者でも「いい知れぬ懐かしさと、哀愁を感じられるだろう」ことが述べられている(130)。1996～97年版でも言及しているが、九份は二二八事件を主題とした映画『悲情城市』のロケ地になったことで観光名所になった街である。九份という街は、民主化の一環として1980年代後半に二二八事件のタブーが解かれたことでクローズアップされるようになり、レトロな雰囲気を持つ“ふるさと”として発見された場所だといえる。

また、2002～2003年版の台湾中部の街・鹿港を紹介する箇所では、古市街・九曲巷が「いずれも観光客用に整備され、煉瓦が敷き詰められた小径で、古きよき台湾をかもし出して」おり、近年は「ディスカバー・タイワン」として古い街並みに注目が集まっているという(157-158)。

古蹟指定についても郷土ブームについても重要なのは、評価される過去があくまでも台湾社会にとっての過去なのであり、たとえ日本植民地統治期の事物が評価されたとしても、それはあくまでも“台湾”というアイデンティティの一部としての認識だという点である。

2008～2009年版の中で台北の見所の一つとしてで紹介された「台湾故事館」(現在は閉鎖している)は、そういう在り方を過不足なく示しているように思われる。この施設は台北駅前のビルの地下で営業していたミニ博物館のような施設である。曰く「レトロなアイテム」であふれた同施設は、「40年前の台湾にタイムスリップしたかのよう」な空間なのであるが、それと同時に「随所にひと昔前の日本の面影が感じられ、昭和世代にとってはどこか懐かしい気分を味わえる」場所にもなっているのである(83)。

民主化/台湾化が進む中で評価されることになった台湾的なものに、日本による植民地統治という経験自体も含まれる事実、さらに、そのために植民地時代の遺物も“ふるさと台湾”の一部として観光対象化されるというプロセスは、以上見てきたように「台湾編」の中身にも反映している。植民地統治について批判力のある用語から中立的なものに移行する要因として、民主化/台湾化/本土化の中で台湾現地で植民地統治を問題視しない立場が弱まったことを指摘することができる。

2. 日本社会における台湾への関心、共感、そして反中国意識

次に日本社会における変化について考えたい。90年代に民主化が進むにつれて、日本における台湾のイメージが向上していったこと、また、日本社会において台湾の歴史文化の露出が高まったことは想像に難くない。図2は、国立国会図書館のウェブ上で公開されているOPACでタイトルに「台湾」を含む文献資料を検索し、その件数をまとめたものである。2000年の急増は、台湾研究のシリーズ本が一度に数十冊刊行されたからであるが、いずれにしても、1990年代と2000年代で顕著な違いを示している。

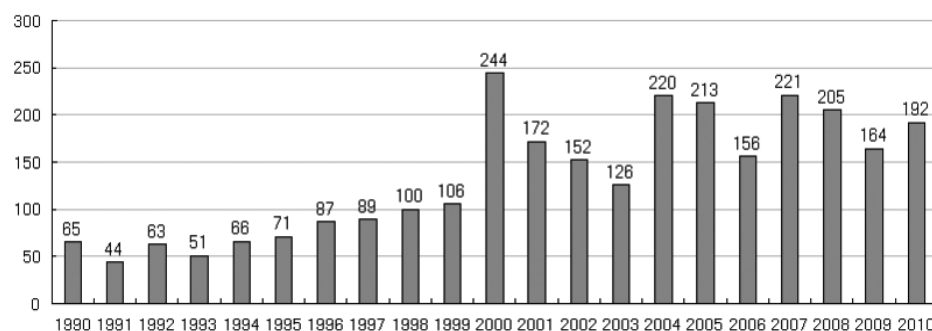


図4 タイトルに「台湾」を含む文献資料件数（単位：件）
注）国立国会図書館OPACを元に作成。

ただし、こうした台湾ブーム——この傾向が持続するのであれば「ブーム」と呼ぶのは不適當であろうが——を支えた社会情勢として、日本社会における“親日の国・台湾”への共感、さらには「台湾ナショナリズムへの親近感」（丸川、2010：12）、そして、しばしばそれと連結しながら表出する「反中国」意識の高まりを指摘しておくことは、あながちの外れなことでもなかろう。

先に述べたように“台湾の親日”は、“二度の植民地化”という台湾特有の事情を念頭において解釈される必要があるが、その一方で、日本においてこうした背景が知られることなく、“台湾の親日さ”が広まっていることも事実である。“台湾の親日さ”が広まることで、植民地統治を深刻なものとして論じる必要がないという風潮が強まったと推定することができる。

第Ⅱ章で取り上げた雑誌『台湾ノスタルジア：懐かしい日本に会おう旅』（図4）は、植民地統治期の遺産を観光対象として紹介するメディアとして、台湾政府のバックアップの下で制作されたものであった。そこで「懐かしい日本」として呈示されるのは、建築物や街並み、鉄道、温泉、そして今も残る神社の鳥居や二宮金次郎像である。植民地統治という過去が、他ならぬ台湾政府によって、日本と台湾の友好関係を促進するために機能するものとして期待されているのであり、そこで植民地統治を批判的に論じることは、そう

した立場からすれば、ひどく場違いな行為となってしまふであろう。同誌の最終ページのコラムの中で、植民地統治という過去を軽視する姿勢が戒められているとしてもである(毎日企画サービス 2009:128)。



図5 『台湾ノスタルジア』の表紙
(毎日企画サービス 2009)

次に「反中国」意識であるが、それが台湾との関連で表出した例として、漫画家小林よしのりによる『新・ゴーマニズム宣言SPECIAL 台湾論』(小林、2000)のヒットがある。この漫画は、<善玉の台湾・本省人>と<悪玉の国民党・外省人ならびに中華人民共和国>という分かりやすい二元論で貫かれている。漫画という表現形式では誇張が大きな役割を果たすことからすればごく普通のことだと言えるのかもしれないが、たとえば蒋介石はあくどく醜い老人のように描かれている。

『新・ゴーマニズム宣言SPECIAL 台湾論』には、作者らが台湾で植民地統治期に神社であったところを訪れ、そこで偶然に日本語世代の老人と出会ったことがドラマチックに描かれた箇所がある(小林、

2000: 267-274)。それは、前述の『台湾ノスタルジア』にも見られる、“親日の国・台湾における昔の日本との出会い”という構図と同じものである。

「台湾編」にみられた推移——植民地統治を深刻に受け止める傾向から軽く言及する傾向への変化——は、「反中国」意識の高まりという観点から見れば、日台間に連携関係を設定する試みと読むことも可能である。すなわち日本と台湾の関係を、(旧)宗主国と(旧)植民地というネガティブな支配従属関係ではなく、単なる“かつて深い関係のあった二つの国家”の連携関係として提示する試み、その表われとして、重い記述から軽い言及への変化が生じているという解釈である。

V. おわりに

以上本稿では、日本による植民地統治期という過去がどのように記述され構成しているのか、そしてその要因にはどのような社会状況の変化があるのかという問題について議論をすすめてきた。

統治期への扱われ方に関する『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・台湾編の分析が示すのは、当初く批判力のある表現でコラムや特集を中心に語るもの>であった植民地統治時代が、<より中立的な用語を用いて各紹介文の中で言及するもの>へと移行するという変化であった。

さらに本稿では、こうしたシフトが生じた背景として台湾社会の民主化に注目したうえで、二つの要因を指摘した。第一が、古蹟指定の活発化や郷土ブームが示す、台湾社会における台湾的なものの評価であり、第二が、日本社会における社会心理的な面での変化、つまり台湾社会への関心・共感の高まり、そして“台頭する中国”に対する対抗意識である。こうした社会的動態が一つの要因となって、日本による植民地時代の取り扱いにおいて上記のような変化が生じたと解釈できる。

以後今後の課題について触れておく。まず、こうした問題が他のアジア地域においてはいかなるものなのかという地域ごとの差異の問題や、『地球の歩き方』以外のガイドブックと比較すればどのような特徴が見出せるのかという問題がある。また、本稿では植民地統治の記述に限定して考察を進めているが、過去の（再）構成という問題に関しては、やはりノスタルジアを射程に含む必要があろう。たとえば（デービス、1990：187-188）のように、ノスタルジアがナショナリズムにおいて果たす効果はしばしば指摘されているが、本稿で論じた文脈においてノスタルジアが機能するものとして期待されているのは、日本や台湾などの個別の国民国家ではなく、むしろ日台という二国間関係である。そしてノスタルジアの担い手としてしばしばシルバー世代が想定されているという、世代論的問題もある。こうした諸々の問題は今後の課題としたい。

<参考資料・文献>

- アーリ、J. 1995『観光のまなざし：現代社会におけるレジャーと旅行』（加太宏邦訳）、法政大学出版局。
- 岩田晋典 2010「渡航自由化以降に出版された海外旅行ガイドブックに関する基礎的研究」『立教大学観光学部紀要』第12号：5-31。
- 岩渕功一 2001『トランスナショナル・ジャパン：アジアをつなぐポピュラー文化』岩波書店。
- 片倉佳史 2009『台湾に生きている「日本」』祥伝社。
- 上水流久彦 2007「台湾の古蹟指定にみる歴史認識に関する一考察」『アジア社会文化研究』第8号：84-109。
- 小林よしのり 2000『新・ゴーマニズム宣言SPECIAL 台湾論』小学館。
- 国際観光振興会 2003『JNTO国際観光白書：世界と日本の国際観光交流の動向』国際観光サービスセンター。
- 酒井亨 2004『哈日族：なぜ日本が好きなのか』光文社。
- 酒井充子 2008『台湾人生』（DVD：太秦株式会社）。

- 酒井充子 2010『台湾人生』文藝春秋.
- JTB広報室 1981『JTBリリース』(第4号)、JTB.
- JTBパブリッシング 2010『るるぶ台湾 '11』JTBパブリッシング.
- 周婉窈 2007『図説 台湾の歴史』(濱島敦俊・他訳)、平凡社.
- 地球の歩き方編集室 1987『地球の歩き方・台湾 1987～88年版』ダイヤモンド・ビッグ社.
- 地球の歩き方編集室 1990『地球の歩き方・台湾 1990～91年版』ダイヤモンド・ビッグ社.
- 地球の歩き方編集室 1993『地球の歩き方・台湾 1993～94年版』ダイヤモンド・ビッグ社.
- 地球の歩き方編集室 1995『地球の歩き方・台湾 1996～97年版』ダイヤモンド・ビッグ社.
- 地球の歩き方編集室 1998『地球の歩き方・台湾 1999～2000年版』ダイヤモンド・ビッグ社.
- 地球の歩き方編集室 2001『地球の歩き方・台湾 2002～2003年版』ダイヤモンド・ビッグ社.
- 地球の歩き方編集室 2005『地球の歩き方・台湾 2005～2006年版』ダイヤモンド・ビッグ社.
- 地球の歩き方編集室 2008『地球の歩き方・台湾 2008～2009年版』ダイヤモンド・ビッグ社.
- 地球の歩き方編集室 2011『地球の歩き方・台湾 2011～2012年版』ダイヤモンド・ビッグ社.
- デーヴィス、F. 1990『ノスタルジアの社会学』(間場寿一・他訳)、世界思想社.
- 毎日企画サービス 2009『台湾ノスタルジア：懐かしい日本に出会う旅』毎日新聞社.
- 丸川哲史 2010『台湾ナショナリズム：東アジア近代のアポリア』講談社.
- 山口さやか・山口誠 2009『「地球の歩き方」の歩き方』新潮社.
- 立教大学大学院ビジネスデザイン研究科 2009「Business now! 株式会社ダイヤモンド・ビッグ社藤岡比佐志氏」『Biz com』34号(2009年9月30日)：1-2.
- 若林正丈 2001『台湾：変容し躊躇するアイデンティティ』筑摩書房.